

鶴川地方のアイヌ文化伝承者、吉村冬子フチの教え

The Teachings of Our *Huci*, Fuyuko Yoshimura, an Inheritor of Ainu Culture in Mukawa

押野朱美 (OSHINO Akemi)

国立アイヌ民族博物館学芸員 (Research and Curatorial Fellow, National Ainu Museum)

秋山里架 (AKIYAMA Rika)

民族共生象徴空間運営本部文化振興部体験教育課主任 (Team Leader for Cultural Programs, Educational Program Division, Culture Promotion Department, UPOPOY)

要旨

吉村冬子フチは、鶴川地方のアイヌ文化伝承者である。幼少期はチセの中で過ごし、父親母親が交わすアイヌ語を聞きながら育った。後世は、言葉や芸能、生活習慣などを伝承する普及活動に務め、冬子フチの姉にあたる新井田セイノフチと共に各地でカムイユカラなどの口演に出向く機会も多くあった。

本研究ノートでは、冬子フチの伝承を家庭内で受け継いでいる孫の押野・秋山（執筆者）が、冬子フチが発信してきたアイヌ文化について冬子フチに関連する資料と照らし合わせながら報告する。加えて、両執筆者が勤務する民族共生象徴空間「ウポポイ」、文化振興部と国立アイヌ民族博物館での教育普及活動、鶴川地方のアイヌ文化を紹介する各自のプログラムでの取り組みを分析することで、「鶴川地方のアイヌ文化伝承者、吉村冬子フチの教え」に迫り、冬子フチに関する資料と位置付ける。

キーワード：鶴川地方アイヌ文化、鶴川地方アイヌ古式舞踊、ウポポイ、教育普及活動、伝承者育成、鶴川地方アイヌ語

Abstract

Yoshimura Fuyuko *huci* (female elder) is an inheritor of Ainu culture and tradition from the Mukawa region. She spent her childhood in a traditional *cise* (house), where she grew up listening to her father and mother speaking the Ainu language. Later in her life, she contributed to spread language, traditional performing arts, and lifestyle.

Fuyuko *huci* often traveled with her elder sister, Araida Seino *huci*, to various locations to give oral performances of *kamuy yukar* and sharing information about other Ainu customs.

In this paper, the authors, who have inherited the traditional cultural knowledge of Fuyuko *huci* as family members (granddaughters), report on the Ainu culture transmitted by Fuyuko *huci*, and compare it with research resources related to her. The authors also introduce two programs that are part of the educational cultural programs at Upopoy: National Ainu Museum & Park, where both of the authors work. In these programs, initiated by the authors and supported by the Cultural Promotion Department and the National Ainu Museum, the authors utilize their living knowledge to introduce the Ainu culture of Mukawa region to visitors. By analyzing their own programs, this paper aims to create a further knowledge resource through which they can understand and inherit the teachings of Fuyuko *huci*.

Key Words : Ainu Culture of Mukawa, Traditional Ainu Dance of Mukawa, Upopoy, Educational Activities, Trainings for Inheritors of Culture, Ainu Language of Mukawa



写真1 冬子フチ（中央）と筆者
（出典：筆者所蔵。平成24年度STV「アイヌ語ラジオ講座」にて）

本研究ノートでは、冬子フチからアイヌ文化を受け継いでいる筆者が、冬子フチが発信してきたアイヌ文化について、家庭内での伝承と上記資料をもとに紹介する。また、筆者は二人とも民族共生象徴空間「ウポポイ」に勤務し、それぞれ国立民族共生公園と国立アイヌ民族博物館で文化の継承と発信に携わっていることから、現在業務として実施している教育普及活動や、鶴川地方のアイヌ文化を紹介する各自のプログラムにも冬子フチの伝承を反映させている。このため、こうした文化紹介プログラムの取り組みについても紹介していく。

本研究ノートは、冬子フチのライフヒストリーと活動記録、そして、それを活用したウポポイでの文化紹介プログラムの取り組みをもとに「鶴川地方のアイヌ文化伝承者、吉村冬子フチの教え」を紹介するとともに、本研究ノート自体を冬子フチの伝承に関する資料と位置付けるものである。

1. はじめに

吉村冬子フチ（おばあさん）¹⁾（1926～）は、鶴川地方のアイヌ文化伝承者である。冬子フチは幼少期を伝統的なチセ（家）の中で過ごし、両親が交わすアイヌ語を聞きながら育った。1974年（昭和49）年から実施された「ウタリの福祉対策」の中で、文化伝承活動や生活と教育の相談ができる拠点が設立され、冬子フチは1980年代ころから言葉や芸能、生活習慣などについての活動に積極的に携わるようになり、以降、アイヌ語教室の講師を務めたり、姉にあたる新井田セイノフチと共に、各地でカムイユカラ（神謡）などの口演に数多く出向くなどの活動を行ってきた。こうした冬子フチの精力的な文化継承の取り組みについては、個人や研究機関によって記録されている。例えば、映像作家の故片山龍峯氏により採録された音声記録資料（以後、「片山資料」）（片山1996-2002²⁾）、それを原資料として制作された千葉大学のデジタルアーカイブ『アイヌ語鶴川方言 日本語-アイヌ語辞典』（中川編2014）、1988（昭和63）年度に北海道教育委員会が実施した聞き取り記録『アイヌ民俗文化財調査報告書』（北海道教育委員会1988）、『平成24年度アイヌ語ラジオ講座テキスト』（押野・押野2012）のコラム記事などである。

1.1. 吉村冬子フチの生い立ち

吉村冬子フチは、1926（大正15）年、鶴川村字チン（現むかわ町汐見2区）に、父、小石川サムクシテ、母チヨの間に生まれた。新井田セイノフチは姉であり、セイノフチと冬子フチは異父姉妹である。冬子フチは現在、老人介護施設にて暮らしている。

むかわ町は北海道胆振支庁管内の東に位置する町で、2006（平成18）年に穂別町と鶴川町が合併し、現在のむかわ町が誕生した。むかわ町を流れる一級河川「鶴川」は、上川支庁の占冠村に立つ狩振岳を源とし、太平洋にそそぐ河川、鶴川水系の本流である。冬子フチが生まれたチンコタン（チン村）は、この鶴川の支流「珍（ちん）」の側にあった村である（国土交通省河川局2007:1,4）。

チンコタンは、冬子フチの母チヨと、祖父、新井田サカンリトクが暮らしてきた土地でもある。姉セイノフチが、祖父サカンリトクからチンコタンについて「新井田家は自分で7代目」（北海道教育委員会

表1 アイヌ民族の社会的出来事と冬子フチを取り巻く出来事 まとめ

時代	社会的出来事・冬子フチに関わる出来事
?	<u>サカンリトク生まれる</u> (「新井田家は自分で7代目」(北海道教育委員会 1988))
1871年(明治4年)	死亡の際の自家を焼く習慣・女性の入れ墨・男性の耳飾り禁止 日本語を学ぶように布達
1876年(明治9年)	猟を行う際のしかけ弓矢毒矢を禁止、北海道内のアイヌの戸籍が完成
1878年(明治11年)	アイヌ民族の呼称を「旧土人」に統一、サケ漁が禁止
1880年(明治13年)	<u>冬子フチの父サムクシテが穂別村で生まれる</u>
1889年(明治22年)	道内のシカ猟を全面禁止 <u>冬子フチの母チヨがチンコタンで生まれる</u>
※1918年から1925年の間?	<u>サムクシテとチヨが結婚</u>
1918年(大正6年)	<u>セイノフチが生まれる</u>
1926年(大正15年、昭和元年)	<u>冬子フチがチンコタンで生まれる</u>
1942年(昭和17年)	<u>チヨ死去(53歳)</u>
1939年(昭和14年)	第2次世界大戦が起きる
1945年(昭和20年)	<u>サムクシテ死去(65歳)</u> 日本敗戦
※1945~1947年頃?	冬子フチ、吉村清(厚真出身)と結婚
1951年(昭和26年)	<u>執筆者の母生まれる</u>
1985年(昭和60年)	<u>執筆者生まれる</u>
1997年(平成9年)	旧土人保護法が廃止、アイヌ文化振興法が公布
2019年(平成31年、令和元年)	「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」公布

(出典：『アイヌ文化・ガイド教本』(北海道観光振興機構 2019: 128-129) 抜粋、戸籍謄本を元に執筆者
家系を執筆者が追加作成)

1988:75) であると聞いたと述べていることから、チンコタンは先祖代々暮らしてきた土地であることがわかる。なお、冬子フチに係る家系は【表1】を参照されたい。

父サムクシテは、チンコタン出身ではなく、鶴川水系の上にある穂別村和泉(現むかわ町穂別和泉)の出身である。冬子フチは、「イヤポ(父)は、体が弱かっただけからか、物静かで口数は少なかった人だった」という(北海道ウタリ協会 [以下、ウタリ協会] 2007:67,69)。また、サムクシテはリウマチを患っていたためにあまり力仕事ができず、シナ皮を細かく裂いたりして、少しだけ体を動かしていたとも話している(ウタリ協会 2007:67)。母チヨについては、「片山資料」によると全盲であり、家事などはすべて手探り

をして生活していたと記されている(前掲 2007:67, 片山 1996-2002)。チヨは外仕事ができなかったが、家の中でイテセ(ゴザ編み)やカエカ(糸より)、刺し子といった手仕事をしていた(ウタリ協会 2007:67, 片山 1996-2002)。冬子フチは「母親は目が不自由だったから、針に糸を通すのが大変で、糸通しをしてほしい度に毎回呼ばれた。でも私も遊びに行きたいもんだから、いっぺんに糸を通して遊びに行っただ」(ウタリ協会 2007:67)とチヨとの思い出について述べている。

姉のセイノフチは1918(大正6)年に生まれ、1992(平成4)年から鶴川アイヌ語教室の講師を務めていた。2001(平成13)年には「アイヌ文化賞」(公益財団法人アイヌ民族文化財団 [以下、財団] 公

式WEBサイトb)を受賞、その後もアイヌ語講師を務めるなどして2011(平成23)年、94歳で死去している(財団公式WEBサイトb)。他兄弟についての資料は少なく、筆者も冬子フチからそうした話を聞いたことがない。

幼少期の冬子フチは、セイノフチが早くに嫁いだため、サムクシテとチヨとの暮らしが大半であった(ウタリ協会2007:67-70)。幼少期の冬子フチが暮らしていたのは茅葺のチセで、夜はラッチャコ(灯火)にイワシの油を入れ、ボロ布を燃ったもので灯りをともしていた(前掲:67-68)。着るものは膝丈くらいのボロ布を繋ぎ合わせた衣服で、冬子フチの小学生時代、セイノフチが冬子フチのためにモンペをつくってくれたのが印象に残っていると述べている(前掲:67-68)。

冬子フチと近所の関わりは、イオマンテ(熊の霊送り)や結婚式、家を建てる際の建前の行事である。これらの行事では、冬子フチは直接行事の準備に関わったということではなく、賑やかになった場面に振舞われる団子などを食べるために、行事の中に入っていたと述べている(北海道博物館アイヌ民族文化研究センター[以下、道博]1996)。普段の日の食べ物は、オハウ(お汁)が中心で、ジャガイモや大根の葉、そこにイワシの油と塩を入れたものが主食であった(ウタリ協会2007:69)。こうした行事の際や日常の中で、家族や近所の人たちは、大人同士であればアイヌ語で話すことが多かったが、冬子フチの両親は、フチの前では日本語で話していた。そのため冬子フチは自分からアイヌ語を使うことも、覚えようとするつもりもなかった(道博1996、片山1996-2002)。

その後大きくなった冬子フチは、小学校に通い始めるが、1・2年時は通うことができたものの、3・4年時のころ、学校が移転し遠くなったことから通学しなくなっていった。勉学よりも家事の手伝いがほとんどで、5・6年時になるころには学校をやめている(ウタリ協会2007:67-68)。冬子フチの学校生活が短くなってしまった背景には、教員の影響もみられる。通学していた1・2年時は、当時の小学校教員に対して良い印象を持っていなかったようで、「アイヌだからなのか、貧しいからなのか、よく廊下に立たされたものだ」と冬子フチは筆者に話したこともある。何も悪いことをしていないという冬子フチに対し、「先生が首根っこ掴んで、ぶん投げられたりして、気を失ったことがある」「先生いなかったらまだ頑張っていたかもしれない」と、教員の印象と学校に対しての想い

について述べている(前掲:67-68)。3・4年時は、冬子フチは学校に通わず家事などを手伝うようになる。その時の思い出として冬子フチは、次のようなことを話している。シナ縄を作るため、近所の大人たちと山へ材料を採りに入った際、入った山は私有地で、山主に捕まり、冬子フチが持っていた荷物や鉈を全部取られてしまったことがあった。母チヨからは「お前に情けない思いさせて悪かった」と泣かれることがあった(前掲:68、片山1996-2002)。

このような日々を過ごし、冬子フチが17歳のときに母チヨが亡くなり、続けて20歳で父サムクシテを亡くしている。その後セイノフチのすすめで結婚したが、生活は苦しく、冬子フチが白米を食べることができたのは、冬子フチが22、3歳ぐらいからだと話している(前掲:68-70、片山1996-2002)。

1.2. 冬子フチの主な文化普及活動の場

1974(昭和49)年、むかわアイヌ協会(以下、協会)が設立された(鶴川町1991:705)。冬子フチは協会設立当初から会員になり(ウタリ協会2007:70)、「ウタリの福祉対策」として1981(昭和56)年に設立された「汐見生活館」(鶴川町1991:706-707)等でアイヌ文化の伝承と保存等に関連する活動を積極的に行ってきた。また1980(昭和55)年には鶴川無形文化伝承保存会(以下、保存会)が発足(鶴川町1991:1085)したことで、「地域住民の各種会合や研修等」の目的で設立された「汐見生活館」などでアイヌ文化の芸能などの練習に力を入れてきた(鶴川町1991:706-707)。押野が共同執筆した拙稿(谷地田・押野2020)で「アイヌ古式舞踊の重要無形民俗文化財指定を記念し、翌1985年2月に札幌市教育文化ホールにて公演会が開催されたことが、アイヌ民族文化祭が開始されるきっかけとなっている」(谷地田・押野2020:145)と指摘しているが、毎年道内で開催されるアイヌ民族文化祭にむけて、冬子フチとともに芸能の練習を行った記憶は筆者にも残っている。

その他、アイヌ民族文化財団が主催するアイヌ語教育事業「鶴川アイヌ語教室」やアイヌ文化普及事業「アイヌ文化フェスティバル」など、様々な事業³⁾でも冬子フチのアイヌ文化普及活動は拡大していったのである。冬子フチが関わった事業については【表2】を参照されたい。

冬子フチにとってウタリ協会や保存会での活動は、冬子フチの幼少期の記憶を蘇らせるもので、冬子フチ

表2 冬子フチの活動 まとめ

時代	できごと
1974年(昭和49年)	アイヌ協会鶴川支部設立
1984年(昭和59年)	アイヌ文化伝承保存会設立
1988年(昭和63年)	第1回アイヌ民族文化祭(アイヌ協会)
1992年(平成4年)	鶴川アイヌ語教室開始(アイヌ協会)
1994年(平成6年)	鶴川アイヌ文化伝承保存会 無形民俗文化財指定 アイヌ語テキスト「アコロ イタク」の編集に協力(アイヌ協会) 鶴川アイヌ語教室助手(アイヌ協会)
1995年(平成7年)	鶴川アイヌ語教室助手(アイヌ協会)
1996年(平成8年)	鶴川アイヌ語教室講師(アイヌ協会) 片山龍峯氏採録開始
1997年(平成9年)	鶴川アイヌ語教室助手(アイヌ協会)、財団の事業
1998年(平成10年)	第1回アイヌ語弁論大会イタカンロー最優秀賞受賞(財団)、財団の事業
1999年(平成11年)	アイヌ文化フェスティバル(財団) 鶴川アイヌ語教室講師(アイヌ協会)、財団の事業
2000年(平成12年)	第13回アイヌ民族文化祭(アイヌ協会) 鶴川アイヌ語教室講師(アイヌ協会)、財団の事業
2001年(平成13年)	鶴川アイヌ語教室講師(アイヌ協会)、財団の事業
2002年(平成14年)	鶴川アイヌ語教室講師(アイヌ協会)、財団の事業 片山龍峯氏採録終了
2003年(平成15年)	鶴川アイヌ語教室講師(アイヌ協会)、財団の事業
2004年(平成16年)	アイヌ文化フェスティバル(財団)、鶴川アイヌ語教室講師(アイヌ協会) 財団の事業、アイヌ文化奨励賞受賞(財団)
2005年(平成17年)	財団の事業
2006年(平成18年)	財団の事業
2007年(平成19年)	アイヌ文化フェスティバル(財団)、財団の事業
2008年(平成20年)	アイヌ文化伝承再生事業(財団)
2009年(平成21年)	アイヌ文化フェスティバル(財団)、財団の事業
2010年(平成22年)	財団の事業
2011年(平成23年)	財団の事業
2012年(平成24年)	アイヌ語ラジオ講座文化指導(財団)他、財団の事業
2013年(平成25年)	財団の事業

(出典:財団提供データ(アイヌ文化フェスティバルに関して)、財団事業(財団公式WEBサイト a-e)を元に執筆者作成)

は「こんな時代になってアイヌ語が話せるなんて思っていなかったから、話したことも習ったこともない。どこかに残っていました」（ウタリ協会 2007:70）と話している。

2. 吉村冬子フチに関する記録資料と文化継承の取り組み

吉村冬子フチが継承してきたアイヌ文化の記録は、研究者や親族などによって、活字や音声データなどに残されている。これまで既に引用で上げてきたものも含め、こうした第三者による記録は、家庭の中で受け継がれてきた伝承を確認することのできる媒体である。またこうした記録や研究を通じ、冬子フチと直接接点のない方々へも冬子フチの伝承を伝えることができる。本項では、改めてどのような記録や研究が残されているのかを確認する。そのうえで、研究者と親族である筆者がそれぞれどのように冬子フチと関わってきたのかを紹介する。

2.1. 吉村冬子フチに関連する資料の紹介

まず、現在最も活用されている資料として、アイヌ語に関する書籍を多数刊行してきた映像作家の故片山龍峯氏が、1996（平成8）年から6年にかけて冬子フチと姉・新井田セイノフチを中心に、約150時間にわたりアイヌ語の記録を行ったものがある。本研究ノートで「片山資料」と呼んでいるこの音声記録は、千葉大学文学部教授の中川裕氏によって全てがデジタル化され、そこから抽出されたアイヌ語鵡川方言音声資料の単語と例文が、千葉大学人文公共学府地域研究センターホームページにおいて、デジタルアーカイブ『アイヌ語鵡川方言 日本語-アイヌ語辞典』として利用することができるようになっている（中川編 2014）。同辞典で視聴できるのは単語と例文のみであり、冬子フチやセイノフチが語る幼少期の出来事などをはじめとするアイヌ文化についての語りは視聴できないが、その元になっている片山氏の記録資料は、冬子フチが継承してきたアイヌ文化、及び鵡川地方に伝承されるアイヌ文化の情報を含んだ重要な資料である。

上記のほか、直接冬子フチの語った言葉が文字として記録されている資料に『アイヌ民俗文化財調査報告書』がある（北海道教育委員会 1988）。この報告書は、北海道教育委員会が1981（昭和56）年から刊行しており、アイヌ文化の保存、伝承のために各地の

アイヌ文化伝承者に聞き取りした内容を掲載している。1988（昭和63）年度に刊行された報告書は、胆振地方の鵡川流域と有珠について調査した内容になっていて、冬子フチとセイノフチ、他数名が調査対象者となり、狩猟採集、儀礼、芸能などの伝承について記録されている。

その他に、公の場で冬子フチが語った記録が、『世代間交流報告書』（ウタリ協会 2007）である。社団法人北海道ウタリ協会（現公益社団法人北海道アイヌ協会）（以下、ウタリ協会）が「エカシ・フチの経験や知恵の継承を促進する」ことを目的として実施している「アイヌ世代間交流推進事業」において、2006（平成18）年に恵庭会場で冬子フチの講演が行われている。『世代間交流報告書』は、その講演の内容がまとめられている資料である。

映像資料として貴重なものとしては、『鵡川に伝わるアイヌ文化：吉村冬子さん【映像資料】』（北海道博物館アイヌ民族文化研究センター 1996）がある。これは、北海道博物館同センターの甲地氏が、1996（平成7）年に冬子フチに聞き取りを行った記録であり、冬子フチの幼少期からの暮らしの様子について映像で記録されている。

最後に、冬子フチによる伝承を本人以外が執筆したものとして、STVラジオで放送された「平成24年度 アイヌ語ラジオ講座」のコラム記事を挙げたい。これは、筆者が講師を務めた旧財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌ語普及事業として実施されたラジオ語学講座の教材である。この事業の目的は「多くの人にアイヌ語に触れ学習する機会を提供するとともに、アイヌ語やアイヌ文化への理解を促進」するものである（財団公式WEBサイト a）。『平成24年度アイヌ語ラジオ講座テキスト』では、冬子フチから教わったアイヌ文化の一端を、筆者がコラムにして掲載している（押野・押野 2012）。

2.2. 片山龍峯氏と冬子フチ

1996（平成8）年から2002（平成14）年にかけて、片山氏は主に冬子フチ宅で、冬子フチ、セイノフチ、鍋沢エカシ（おじいさん）⁴⁾を対象にアイヌ語の音声を採録している。片山氏が鵡川を訪れたきっかけは、1994（平成6）年に北海道ウタリ協会が刊行したアイヌ語テキスト『アコロ イタク AKOR ITAK[アイヌ語テキスト1]』のビデオ版を収録したことである。この収録時にアイヌ語話者を北海道中探

し歩いていた片山氏は、鶴川に住んでいる冬子フチとセイノフチに出会った(片山 2001)。

以下の引用文は、財団の事業普及啓発セミナーにて、片山氏が「言い伝えとアイヌの世界観」(片山 2001:34)で報告した内容の抜粋であり、この内容については「片山資料」(片山 1996-2002)でも、片山氏と冬子フチのやり取りが記録されている。また、この普及啓発セミナーは「学校教育・社会教育関係者や一般の方でアイヌの文化や伝統等について基礎的な知識を持っている方々を対象に、アイヌの伝統等やアイヌ文化等(高度な内容)をテーマとしたセミナーを開催することにより、アイヌの伝統等に関する知識の普及啓発を図ろうとするもの」(財団公式WEBサイト e)である。片山氏の報告から冬子フチのアイヌ文化普及活動に対する意気込みを読み取ることができる。以下、引用文である。

最近、私は北海道の鶴川というところによくいきます。そして、そこに住んでいるアイヌのフチの一人、吉村冬子さんという方に、自分の母親、おばあさんから受け継いでいるようなウパシクマはないだろうかとということを訊ねたんですね。そうしたら、分からないというのです。ところが、そのうち突然、このアイヌ文化振興財団の主催のアイヌ語弁論大会「イタカン ロー」というのがあるんですが、そこでウパシクマをやってみると言い出したんですね。アイヌ語でウパシクマを語るというので、私はびっくりしたんです。吉村さんが発表したテーマは犬でした。犬を飼っていて、山菜取りなどには必ず山につれて行ったわけですが、その犬の思い出、それから、犬の扱いとか、犬というのは本当に重要だということをウパシクマとして発表したと言うんです。

それで、なぜ発表する気になったのか彼女に聞いてみました。吉村さんは「子供たちに伝えたかったの」と答えました。するとそばで聞いていた鍋沢さんというエカシは、「なにかウパシクマはないかと、あんたが何度も聞いたもんだから」と言いました。つまり私が吉村さんに、何かウパシクマはないか何回も聞いたので、それ



写真2 冬子フチが筆者にアイヌ文化を教えている様子
(提供:筆者 冬子フチ宅にて)

が刺激になったというのが鍋沢さんの考えでした。吉村さんは「そうそう、それもある」と答えて、「自分の子供にも、他の若い人たちにも聞いてほしいから」といいました。また「やっぱりウパシクマというのは、自分の体験したことを本当に人が伝えてやることだ。真の心から残してやりたい言葉が、ウパシクマだと思う」とも答えました。私がいろいろと吉村さんに、自分の中にウパシクマとして伝えたいものがあるかどうかということは何回も聞いているうちに、ふっと犬のウパシクマを子供に残したいという気が起こって、アイヌ語弁論大会に犬のウパシクマとして発表したのですね。

この経験から、こちらからも刺激を与えるということは重要だなと思いました。ただアイヌのお年寄りから汲み取るだけではなくて、こちらも向こうに何かぶつけていくと、向こうはそれで何か開かれてくることがあるんだなと、強く感じたわけです。小さな経験ですが、アイヌ語によるウパシクマも、何かの機会に現代でも蘇ることが可能ではないか、と考えたわけです。

(片山 2001:34、片山 1996-2002)

冬子フチの幼少期、父サムクシと母チヨは「お前の時代にはアイヌ語は必要ない」(押野・押野 2012:21)と冬子フチに言いつけている。そのため冬子フチは「自分からアイヌ語を使うことも、覚えようとしなかった」(道博 1996)が、「子供たちに伝えたかったの」(片山 2001:34、片山 1996-2002)

またアイヌ語を口にするようになった。こういった、アイヌ文化に対する冬子フチの想いと、熱心にアイヌ語を研究する片山氏に対しての想いが重なり、冬子フチは「第1回アイヌ語弁論大会イタカンロー」へ出場することを決心したのである。大会では「クヤイ オモッテ イタク（私が体験した話）」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 1998:23-26）と「クコロ ウパシクマ（若い人に伝える話）」（前掲:23-26）を語り、最優秀賞を受賞している（財団公式WEBサイト c）。

片山氏との体験などについて冬子フチは「子どものときに聞いていて忘れてしまったことをみんな掘り出されたような感じで、アイヌ語はなんとか若い人たちに伝えられるという気持ちにいます。本当に感謝しています」（ウタリ協会 2007:70）と述べている。

2.3. 冬子フチと筆者

筆者の父が1990（平成2）年に死去すると、筆者は冬子フチと過ごす時間が多くなっていった。冬子フチと過ごす時間の中で記憶していることは、田んぼのあぜ道でイオンルイカ（子守唄）などの歌を練習し、「アイヌ語の発音が違えば、意味がかわるんだからきちんとはあちゃんのいうこと真似しなさい」、「節（こぶし）が入らないとなんぼ一生懸命歌ったって何もうまくないんだ」と教わったことである。他にも、冬子フチ宅で近所の人たちが集まると、冬子フチはイモシト（ジャガイモの団子）を作って食べさせてくれたことも記憶している。片山氏と冬子フチたちが昔話をしているときには、筆者も加わり、アイヌ語の発音を真似してみたり、練習したイオンルイカなどを片山氏に披露したこともある（片山 1996-2002）。中でも筆者が冬子フチと過ごす時間で深く印象に残っていることは、筆者の小学校時代のことである。同級生から「あ、犬だ（アイヌだ）」と指さして馬鹿にされ、冬子フチや筆者の母に泣きついた時、冬子フチは「言い返してこい！ 言い返してくるまで家になんて入れない！」と、筆者を家から追い出したものである。

冬子フチが放った言葉は、現在の筆者に大きな影響を与えている。冬子フチは、人が人らしく生きること、多文化共生、多民族共生の考え方を理解していたからこそ、厳しくも優しく育ててくれたのではないかと筆者は考えている。

3. 筆者の「ウポポイ」での活動

これまで見てきたように、冬子フチはアイヌ語、アイヌ文化に関する豊かな経験を伝えてきた重要な伝承者である。その冬子フチから、直接アイヌ文化を受け継いだ筆者が、どのようにその知識を活かしているかを最後にまとめたい。

2020（令和2）年7月、新たに「アイヌ文化の復興と発展、また、先住民族の尊厳を尊重し、差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築いていくための象徴」として、「ウポポイ」（民族共生象徴空間）がオープンした（民族共生象徴空間ウポポイ公式WEBサイト）。「ウポポイ」の主要施設として、先住民族アイヌの歴史と文化を展示・調査・研究することなどを役割とする「国立アイヌ民族博物館」、舞踊の上演やキッズ向けのプログラム等を体験できる施設が設けられている「国立民族共生公園」及び「慰霊施設」がある。これらの施設のうち、押野は「国立アイヌ民族博物館」、秋山は「国立民族共生公園」に勤めている。

以下、筆者たちが実践している、鶴川地方のアイヌ文化及び冬子フチが伝えるアイヌ文化に関連するプログラムや、教育普及活動の事例を紹介する。

3.1. 国立アイヌ民族博物館での教育プログラム

押野は、国立アイヌ民族博物館の学芸員として、主に教育普及プログラムの開発・実施等を担当している。またアイヌ文化の芸能を専門として研究を行っている。

博物館の一般来館者に対する教育普及活動の一環として、2021年度までに芸能に関するプログラム「みんなのうたおどり♪」と「子守唄から知る、生活の中



写真3 「みんなのうたおどり♪」活動の様子



写真4 「ボン劇場」活動の様子(提供:筆者)

のうたおどり」を実施した。プログラムの内容は、絵本の読み聞かせや歌謡や舞踊といった芸能などについて参加者に対話を通して見せたり聞かせたりする活動である。

このプログラムの中で、押野は冬子フチから教わったホリッパ(踊り)やアペフチカムイ(火の神)のカムイユカラ(神謡)などを実演している。

「国立民族共生公園」では、アイヌ文化の芸能を観ることができるが、アイヌ文化において、こうした芸能をはじめとする儀礼やアイヌ語などの無形文化は、生活の中で生まれてきたものである。冬子フチがこれまで体験してきたイオマンテやユカラは、本来、こうしたステージ上で上演されたものではなく「生活の中の出来事」なのである(押野 2001:23)。

上記2つのイベントは、冬子フチが歩んできたアイヌ文化を、来館者自身にも「生活の中の出来事」と捉え、強いては「人々が文化を「コト」として共同体で共有」(小川 2021:16-19)してほしいと考えたプログラムである(押野 2001:23)。同様に、展示されている資料を「生活の中の出来事」として捉えてもらうため、基本展示室で押野が担当する「探究展示テンパテンパ」コーナー⁵⁾では、冬子フチから筆者らが受け継いでいるタマサイ(首飾り)を展示し、タマサイを通して来館者に現代を生きるアイヌ民族について解説を行っている。

3.2. 国立民族共生公園 体験プログラム

秋山は「国立民族共生公園」にある「伝統的コタン」にて、キッズ向けプログラム「ボン劇場」と「口承文芸実演」を実施している。「ボン劇場」は、来

園する子どもや親たちを対象としたプログラムで、アイヌ文化をテーマにしたオリジナルの物語を、アイヌの歌や踊りを交えた紙芝居と、エプロンを使った人形劇として上演している。口承文芸実演は、アイヌの暮らしの中で語られてきた物語や叙情歌などを、アイヌ民族である職員が交代で実演しており、秋山は冬子フチから教えてもらったヤイサマ(即興歌)を通して、アイヌ文化が、冬子フチから孫へと継承されることを紹介をしている。この2つのプログラムを実施している大きな目的は、来園者がアイヌ文化の世界観にふれ、多文化・多民族について知ってもらうことである。冬子フチが筆者に伝えた、鶴川地方のアイヌ語や歌踊りを多くの来園者や次世代に広めること、そして来園者に筆者が受けた小学校時代の出来事(2.3参照)や、冬子フチの経験(1.1参照)を伝えることで、多文化共生、多民族共生の理解に繋げてほしいと考えている。

4. 今後の課題

本研究ノートでは、冬子フチについて片山氏が採録したアイヌ語鶴川方言音声資料をはじめとする関連資料から、ライフヒストリーを整理した。これまで冬子フチが体験してきたイオマンテやユカラなどは、「生活の中の出来事」としてみてきたものであり、それは正しく冬子フチが触れてきたアイヌ文化の一端である。また筆者各自のプログラムでは、筆者は冬子フチから教わった「コト」を多くの人々に伝えている。

本研究の今後の課題としては、冬子フチの祖父サカンリトクたちが歩んできたアイヌ文化についても調査し、それをアイヌ民族をめぐる大きな歴史的背景と照らし合わせることで、さらに冬子フチが継承してきたアイヌ文化を明確にすることである。そして筆者の家に伝わる「ウパシクマ」(言い伝え)として、筆者各自のプログラムにも繋げていきたい。

本研究ノートは、「鶴川地方のアイヌ文化伝承者、冬子フチの教え」を「ウパシクマ」として継承していくための第一歩である。

本稿は、国立アイヌ民族博物館令和3年度調査プロジェクト「芸能の持続的な継承と発展に関する研究：保存会の実態調査と担い手の人材育成」(課題番号：2021A02、研究代表者：押野朱美・谷地田未緒)の一環として発表されています。

注

- 1) 本研究ノートで記すアイヌ語は、千葉大学人文公共学府地域研究センターホームページ、デジタルアーカイブ『アイヌ語鶴川方言 日本語-アイヌ語辞典』を参考にアイヌ語の表記と意味を記している。
- 2) 片山資料は、故片山氏が鶴川方言辞典作成を目的に採録したもので、同資料の辞書項目になるアイヌ語は、千葉大学人文公共学府地域研究センターホームページ、デジタルアーカイブ『アイヌ語鶴川方言 日本語-アイヌ語辞典』で視聴することが出来るが、その他の音声については未公開である。本研究ノートの執筆者は、同資料の採録対象者の子孫になるため片山資料を聴くことが出来る。
- 3) 事業の展開は「1. アイヌに関する総合かつ実践的な研究の推進、2. アイヌ語の振興、3. アイヌ文化の振興、4. アイヌの伝統等に関する普及啓発、5. アイヌ文化の伝承者育成」と、5つの柱からなっている(財団公式WEBサイトd)。
- 4) 故鍋沢強巳氏 鍋沢エカシは、沙流川流域富川(現日高町富川)の出身であり、冬子フチ、セイノフチとは親交が深かった。
- 5) 「探究展示 テンバテンバ」は、子どもから大人まで、さわって楽しく学べることができるコーナーである。18個の体験キットがあり、各テーマごとに分かれた基本展示室を行き来しながら学びを深めることができる。テンバテンバはアイヌ語で「さわってね」という意味である。

参考文献

- ウポポイ(民族共生象徴空間)公式WEBサイト「ウポポイについて」
<https://ainu-upopoy.jp/>(2021年10月28日閲覧)
- 小川義和 2021「社会の変化と「発信する博物館」の意義」『発信する博物館 持続可能な社会に向けて』:16-19。
- 押野朱美・押野里架 2012『平成24年度「アイヌ語ラジオ講座」テキスト』(1):23。
- 押野朱美 2021「アイヌ民族の芸能から考える博物館の今後のあり方」『第69回全国博物館大会資料Ⅱレジュメ』
- 片山龍峯 1996-2002 アイヌ語鶴川方言・アイヌ文化聞き取り調査(音声資料)
- 片山龍峯 2001「(4) 言い伝えとアイヌの世界観」『平成12年度普及啓発セミナー報告』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/details/post-129.html>(2021年10月28日閲覧)
- 公益財団法人アイヌ民族文化財団公式WEBサイトa「ラジオ講座」
<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/language-spread.html>(2021年10月28日閲覧)
- 公益財団法人アイヌ民族文化財団公式WEBサイトb「平成13年度アイヌ文化賞」
<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/details/1384.html>(2021年10月28日閲覧)
- 公益財団法人アイヌ民族文化財団公式WEBサイトc「平成16年度アイヌ文化奨励賞(個人)」
<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/details/1677-1.html>(2021年10月28日閲覧)
- 公益財団法人アイヌ民族文化財団公式WEBサイトd「事業紹介」
<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/index.html>(2021年10月28日閲覧)
- 公益社団法人北海道観光振興機構アイヌ文化分科会ワーキンググループ 2019『アイヌ文化・ガイド教本』:128-129。
- 国土交通省河川局 2007『鶴川水系の流域及び河川の概要(案)』
https://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/shaseishin/kasenbunkakai/shouinikai/kihonhoushin/070731/pdf/ref1-1.pdf(2021年10月28日閲覧)
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 1998『第1回アイヌ語弁論大会イタカンロー 大会プログラム』札幌:財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

- 社団法人 北海道ウタリ協会 1994『アコロ イタク AKOR ITAK[アイヌ語テキスト1]』札幌:(株)クルーズ
- 社団法人 北海道ウタリ協会 2007「恵庭会場」『世代間交流報告書』:67-70。
- 千葉大学人文公共学府地域研究センター「アイヌ語鶴川方言 日本語-アイヌ語辞典」
<https://www.gshpa.chiba-u.jp/cas/Ainu-archives/index.html>(2021年10月28日確認)
- 中川裕編 2014「アイヌ語鶴川方言の音声資料による記述的研究」(2011-2013年度科学研究費助成事業研究成果報告書、研究代表者中川裕)
<https://kaken.nii.ac.jp/en/file/KAKENHI-PROJECT-23320080/23320080seika.pdf>(2021年10月28日閲覧)
- 北海道教育委員会 1988「昭和63年度調査報告書(鶴川地方)」『昭和63年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅷ)』:75
- 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター 1996「鶴川に伝わるアイヌ文化:吉村冬子さん【映像資料】」甲地利恵採録
- 鶴川町 1991「第7節 ウタリの福祉」『続鶴川町史通史編』むかわ町:鶴川町 p705-707,1085
- 谷地田未緒・押野朱美 2020『芸能の継承 — 「アイヌ古式舞踊」の保存継承をめぐる文化政策研究』文化政策研究 第14号抜刷 日本文化政策学会 p145